

## 博士論文要約

岩澤 龍彦

本博士論文の課題は、1920年代のハンネス・マイヤーの建築家としての活動を、ドイツとスイス、ソ連の建築界の中に位置付けることである。マイヤーは建築家として設計活動を行う傍らで、各プロジェクトに際してはテキストを、そして時にはマニフェストをも著し、さまざまな組織と関わってきた。マイヤーのマニフェストやテキスト、マイヤーが関わった組織が仮想敵とした陣営らのテキストを参照して各国の建築界の構図を見出し、マイヤーをその構図の中に位置付けることが本博士論文の課題であり、試みである。

はじめに、マイヤーが1926年に編集者として参与したスイス・バーゼルの建築雑誌『ABC』（と同じ編集者を有する雑誌『G』）とその仮想敵を明らかにした（第1章、第2章）。

その仮想敵とはデ・ステイルのドゥースブルフ、ドイツ工作連盟のリーツラー、ムテジウス、グロピウスであり、かれらは、その契機、目論見を異としながらも、結果としての形への探究に勤しんでいた。この点を批判したのがミースであり、ミースは結果としての形に取り組むかれらを「フォルマリズム」と称した。だがミースのフォルマリズム批判は示唆に富んだものであった。なぜならば、フォルマリズムは個人主義的な芸術家像、技術に対して自律する芸術としての建築を保持する態度をも有していたためである。仮想敵であるフォルマリズムは結果としての形に拘泥し、個人主義的な芸術家像、自律芸術としての建築像を保持していたことが明らかになった。

では『ABC』、『G』はどうだったのか。その主要メンバーであったミース、スタム、シュミットのプロジェクトおよびテキストからは、プロセスとしての「建設」、「構成（形）」と「構造」との対比における「構造」の重視、集団主義志向、技術・状況決定論の支持、他律的な建築的態度が明らかとなった。マイヤーもこの『ABC』のメンバーらに同調していたが、「機能」を独自に把握して、マイヤーなりの「建設」を主張した。すなわち、マイヤーのいう「建設」とは、建築プログラムを作動させることの意を「機能」に込めて、建物の目的としての「機能」を、現実の諸条件を考慮しながら、ダイアグラムや算術といった科学的な手段で構造へと翻案するプロセスであった。この意味での「建設」を具現化したのがヴィトヴァーと共同設計したペータースシューレ・コンペ案と国連コンペ案だった。

その後、マイヤーは活動拠点をバウハウスへと移し、1927年には建築科のマイスターに、1928年には校長職に就任し、1930年に政治的事由から解任されるまで活動した（第3章）。マイヤーが校長を務めていた期間のバウハウスで展開されたのが、フォルマリズム批判であり、その急先鋒がカライであった。カライのフォルマリズム批判の要点は、バウハウスが芸術と技術の二元論、自律芸術を保持していることにあった。そのカライは建築

論において「生の物質的組織化」としての建物を主張し、技術偏重のリアリズムへの反省と生への回帰を示した。これを受けるようにしてマイヤーもまた、建築論においては生を分析する手段としての生物学を取り入れ、実践においてはADGB連邦学校案で集団生活という「生の物質的組織化」を、地勢を活かしながら具現化した。カライの建築論、マイヤーの建築論および建築実践はリアリズムの更新を果たしたという点で、オルタナティブ・リアリズムと称しうるものであった。

しかし、マイヤーの実践をめぐっては、独ソ連建築界を考慮したとき、ねじれともいうべき歪んだ事態が生じていた。第一に、リアリズムはフォルマリズムを批判したが、フォルマリズム的見地からリアリズムの案は優れているとみなされていた（第2章第5節）。グロピウスの『国際建築』やマイヤー就任以前に発行された機関紙『バウハウス』でスタムやマイヤーの案が紹介されていたことがその証である。第二に、マイヤーによる連邦学校案が「生の物質的組織化」に成功しているがあまりに、労働組合の学校からナチスの学校へと転用されたことである（第3章第3節）。マイヤーはプログラム（人間の集団組織化）の作動（機能）に忠実でありすぎたがために、その建物の形はイデオロギーを獲得しえず、その校舎の赤色は組合の赤色からナチスの赤色へと容易に転じられたのである。このことがマイヤーのオルタナティブ・リアリズム的態度の成功と落ち度を示していた。そして第三に、1920年代後半のソ連でのマイヤー受容を顧慮したときのマイヤーの政党政治性についてである（第4章）。マイヤーは校長職解任時に、政党政治性を理由に解任することは不当であると反論していたが、ソ連での受容およびマイヤーがソ連で企画したバウハウス展をみてもその反論自体が疑わしくなるのである。マイヤー／ヴィトヴァーによる国際連盟案は人民の発明として、非ブルジョワ的な案としてソ連人たちから認められた。連邦学校案はその教育プログラムについては批判されたが、「生の組織化」としての建物を示している点でソ連人たちから同意を得た。そして、マイヤーが渡ソ後に企画したモスクワでのバウハウス展は、マイヤー・バウハウスを「赤いバウハウス」、「マルクス主義的建築教育機関」として展示する試みであった。ソ連人たちから政党政治的、イデオロギー的によしと評価されるほどの質を、マイヤーが手がけた案は有していただけでなく、マイヤー・バウハウスはそのように演出するだけのものを産出していった。

では、1930年に渡ソしたマイヤーはソ連建築界に好意をもって受け入れられたのだろうか。否、1920年代後半では全般的な同意を得られたが、渡ソ時にはソ連建築界は様変わりしていたために、留保を付け加えられていた。すなわち、1930年時点でのマイヤーはドイツでもソ連でもその政治性の点で批判を受けていたのだ。この原因はマイヤーを批判したモルドヴィノフとかれが指導的立場に立つ組織、ヴォプラのソ連建築界での立ち位置、そして、独ソ建築界のズレに求めることができる。

ソ連建築界でもドイツ・スイス建築界と同じような構図が生じていた（第5章）。芸術と技術の二元論を抱えながら、視覚的知覚の心理実験による形の導出に注力するアスノヴァという「フォルマリズム」、そして、アスノヴァをフォルマリズムとして批判し、西欧

型の機能主義の「目的」を「社会主義建設」という「目標」に据え代えて「社会的コンデ  
ンサー」としての建物の発明に取り組むオサという「リアリズム」があった。そして、ア  
スノヴァをフォルマリズムとして忌避しながら、オサ（リアリズム）を技術フェティシズ  
ムとして批判し、建築における一元化装置としての「目標」の内実を「五ヵ年計画」へと  
更新し、技術とイデオロギー的知覚作用をもたらす「芸術」との調停を試みた「オルタナ  
ティブ・リアリズム」としてのヴォプラがあった。ここにもフォルマリズム、リアリズ  
ム、オルタナティブ・リアリズムの三項関係が見出せるのである。

たしかにマイヤーとモルドヴィノフ（ヴォプラ）は各建築界において見出しうる三項関  
係においては同じ立ち位置にあったかもしれない。しかしながら、その両者の間には、プ  
ロレタリア建築には必要不可欠なイデオロギー的心理作用をもたらす「芸術」の有無とい  
う埋め難い溝があった。この溝がためにマイヤーは当時のソ連建築界をリードしていたモ  
ルドヴィノフから批判を受けた。

この溝を埋めるべくマイヤーは渡ソ後、その建築論において心理的組織を「芸術」と称  
することで、「芸術」を取り込もうとし、プロレタリア建築に順応する姿勢を示した。し  
かしながら、それは目まぐるしく変転するソ連建築界のある一つの時点にしか適さない方  
策でしかなかった。渡ソ後のマイヤーの活動とソ連建築界の変化を照合することが今後の  
課題である。